

特242

5

上村文三著

世界の裏を剖く

新党運動の真相

10 SEN

475

黒幕に躍る次期政權を
目指す人々

1



0006526-000

特242-5

新党樹立運動の真相

上村文三・著

教材社

昭和12

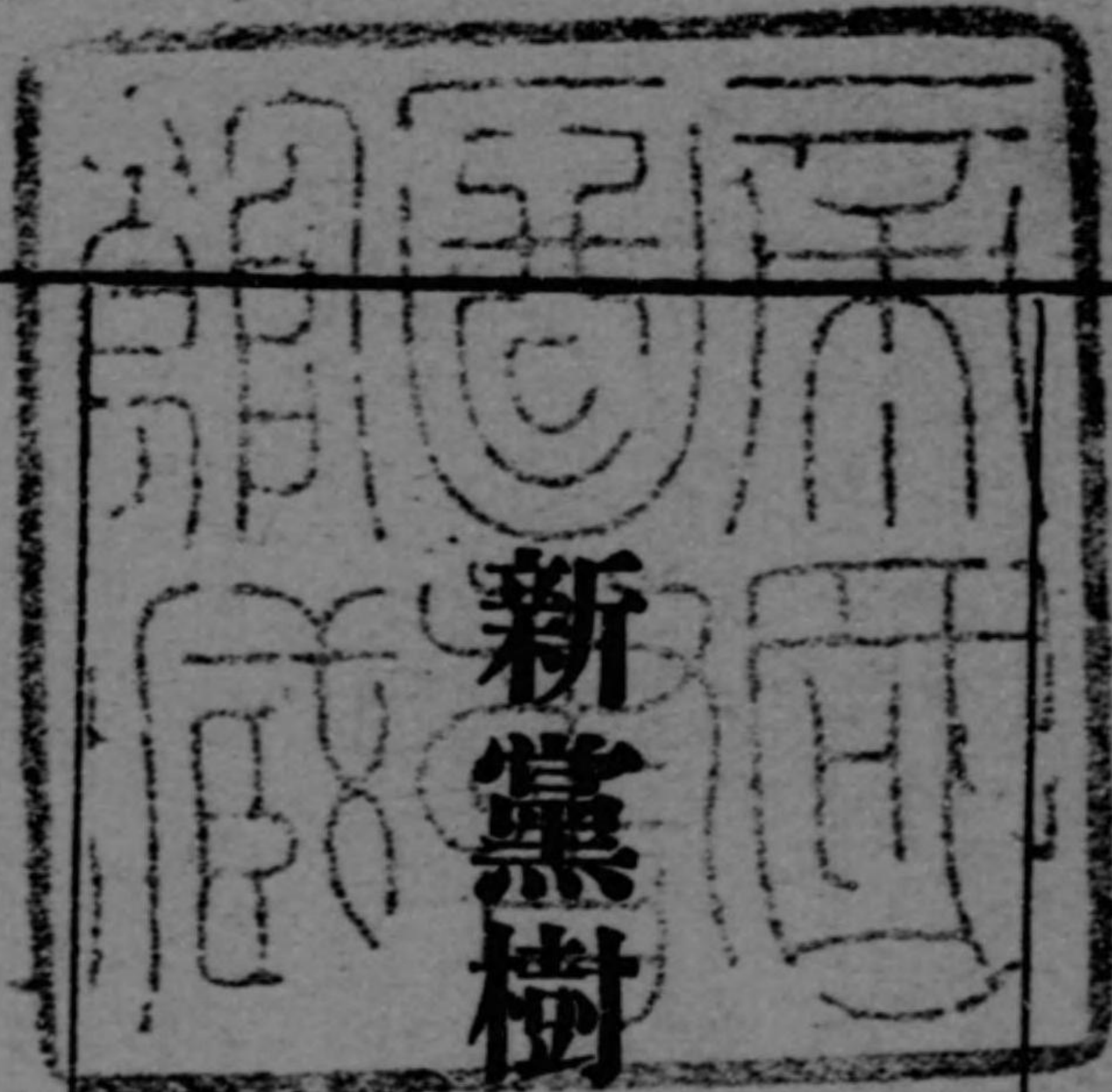
ABF

この著作物は、著作権者不明のため、第67条の規定に基づき、平成12年
けで文化庁長官の裁定を受け使用する

特 242
日

上村文三著

新黨樹立運動の真相



東京・教材社・發行



目次

- 一、革命の波は世界の岸を打つ……………(一)
- 二、軍部は何を教へられたか……………(四)
- 三、政黨は何を學んだか……………(二)
- 四、挫折した新黨運動……………(五)
- 五、政民兩黨内の新潮流……………(三)
- 六、無産黨は何うなるか……………(四)
- 七、庶政一新の方向轉換の兆……………(七)
- 八、國民の黨出現の必然……………(三)
- 九、右翼は何うなるか……………(四)

一、革命の波は世界の岸を打つ

廣田内閣の崩壊から林内閣の出現まで、この間十数日の緊張は、決して二・二六事件當時に劣るものではなかつた。一步を誤れば國運は何うなるかと云ふ戦慄は、恐く何人も禁じ得なかつた所で、林内閣が成立してホツと胸をなでおろしたと云ふのが、各方面とも偽りのない眞情である。林内閣が決して満足な内閣だといふのではない。寧ろ廣田内閣以上の弱體内閣だが、あの場合成立の見込ある内閣ならば何んな内閣でもよかつたのである。従つて林内閣の運命は短命を豫想され、第七十議會は何とか無事に切り抜け得るとしても、議會後には必ず種々の問題が惹起して又復政局の風雲急を告げることになるのではないかと見られてゐる。

そこで次の政變來を豫想して、これに備へんとする準備工作は政界に着々として進められてゐる。軍部方面においても、其の心構へは立らぬものゝやうである。一つの政變から次の政變へ、絶えず政變の波をうち返してゐるのが、非常時局の一面の姿だ。しかし此の政變の波はた

徒らに打ち返すといふことはないのである。その間に一度づゝ、或は數歩十數歩づゝ、政治の進化が刻まれて行く。政變の激動の中に於いて、國民も政黨も、或は軍部も重臣も、貴重な教訓を汲み取り、深刻な反省を重ね、政治再建を行つて行くのである。それを表裏して經濟も社會事情も變化して行く。昨日の岸も、いつの間にか今日の岸ではなくなる。時代の轉換は斯くして意識的にまた無意識的に行はれ、その急激、斷層的に行はれるものを革命といふに他ならないのだ。革命は必ずしも流血の慘を伴ふを要しない。そして革命は、社會的經濟的の革命に先立つて政治革命の行はれるのが史上の通例である。徳川幕府の打倒、明治維新の樹立によつて、近代日本の資本主義の經濟と社會は逐次形態を整へるに至つた。

今日の世界は、日本のみならず各國に於いて、革命時代が進行しつゝある。歐洲大戰を境として、革命時代は開始され始めた。ロシアやドイツやイタリーやスペインの例のみに止まらず、イギリスでもアメリカでもフランスでも、更らに隣邦支那でも、革命的進化が行はれつゝある。議會主義の宗家イギリスにおいて、多數内閣主義は拋棄され舉國內閣制が實現した。アメリカでは大統領の獨裁權が驚くべき強化擴大を遂げ、ユラの名の下に社會主義國を彷彿せし

める社會經濟政策が強行されてゐる。フランスには人民戰線内閣が成立し、支那においては清

朝崩壞以來國家統一が、近代的意識と形態との下に着々進行せんとしてゐる。各國家はその位置と境遇、國內事情の相違等によつて、夫々にその掲ぐる目標、イデオロギ―とその實踐化の形態を異にしてゐるけれども、革命時代にあると言ふのは、決して誇張の言ではない。そして其の前後緩急があり、その掲ぐる標榜、イデオロギ―と其の實踐化の形態は異にしてゐるけれども、最も其の國情に即應した方法において、其の民力を最も完全に發揚し得るやうな方法において、この世界的革命時代の彼岸に到達せる國民が、次代の世界で優位を與へられるのである。

幕末における鎖國主義が誤りであつたやうに、今日において現状墨守は國運の將來を誤るものである。それと同時にまた、國情も無視し民意を離れた盲目的革新、猪突的改革も國家を脆弱化する以外の結果を齎らさない。國の亡ぶるは外より亡ぶるに非ず、内より亡ぶとは史上の事實の教へる所である。現下日本の時局の重大性について人々が最も心配するのも其處だ。何うか誤りなく政治が指導され、革新すべきものが速かに革新されて、國際の險惡狀勢を見事に

突破し、輝やかしい次の時代の優勢國たらんことは、國民のひとしく冀望するところである。現下の政情は果しに此の國民待の望する線に沿ふて進展しつゝあるか何うか。これを政黨の動向と軍部の態度について検討して見やうといふのが本書の目的である。

二、軍部は何を教へられたか

先般の政變で國民は一方で軍部横暴の印象を受けると共に、他方では政黨の腰抜けを痛感した。この有様で、政治は一體どこへ行くのかと戦慄した。しかし政治は何處へも行かず、見る通りの林内閣成立で一段落となつたのであるが、軍部も政黨も、政變を通じ國民の聲に聽いて、大いに反省するところがあつたのは争はれない。

軍部は時局認識の足らざる政黨と事を共にする能はずといつて、政黨に宣戰を布告したのであつた。然らば軍部の時局認識とはいかなるものであるかと云へば、かいつまんで言へば先づ次のやうに要約し得るだらう。

現下の國際情勢はますます急迫しつゝある。殊に我國としては極東情勢の險惡化に備へ、近い將來に如何なる事が勃發しようとも必勝を期し得るだけの國防を完備しなければならぬが、それには狹義國防だけでは足らぬ。いはゆる廣義國防を整へることが必要で、そのため庶政一新を斷行せねばならない。即ち政治、經濟に根本的改革を加へ、國家の全組織を建て直して、全國民が進んで舉國一致に邁進し得るやうにしなければならぬ。それでなければ、この世界的非常時は乗り切れない。

これが軍部の根本認識で、齋藤内閣以來、非常時の政局は、この認識に立つ軍部勢力によつて推進されて來たのである。此間に種々の事件もあり、迂餘曲折もあつたが、軍部の進出につれて政黨がますます後退したことは人々の見る通りである。黨人はこれを嘆いて、五四四一の割合で後退したと云つてゐる。政黨からの大臣が、齋藤内閣において五名、岡田内閣では四名、廣田内閣でも四名、林内閣では一名に減少してしまつた。この次は零となる番かも知れないといふのが、政黨方面の抱く切實な關心なのである。政黨代表が一人も内閣に入れないと云ふことは、政黨が全然政權から遮断されることを意味するに他ならないから、政黨としては生

命を奪らる如くに恐怖するものも無理からぬ次第であらう。

林大將は組閣に際して、政民昭和の各黨より一名づゝの閣僚を交渉したが、それには黨籍を離脱するといふ事が條件となつてゐた。黨籍離脱、すなはち政黨人としては内閣に入れないといふので、これに對して民政の永井柳太郎氏は「政黨人に黨籍離脱を要求するのは自殺を求むるものである」と名文句を吐いて直ちに入閣を拒絶し、政友の中島氏も續いて之を拒絶し。結局、昭和會の山崎氏だけが入閣したのであつた。

林大將が斯くの如く黨籍離脱を要求したのは、廣田内閣瓦解の原因が軍部と政黨の正面衝突で、寺内陸相によつて、「時局認識を異にする政黨と事を共にすることは出来ぬ」と宣言された後なのであるから、軍部の意志で推し出された林大將としては、黨籍離脱を要求せざるを得なかつたわけである。だが林首相は其後議會に於いては、「何故政黨人の黨籍離脱を要求したか」といふ質問に對して、「組閣當時の情勢からして己むを得なかつた、然し今日ではその必要もないと思ふ」と答へてゐる。即ち軍部情勢の變つたことを云つてゐるのである。

陸軍は廣田内閣に對して議會解散を迫つた。この時、永野海相は豫算第一主義の立場から調

停に乗り出し、陸軍と政黨との妥協、といはんよりも政黨に屈服の意を表はさせることに依つて陸軍をして之を容れさせようとした。而も陸軍は、この調停をも斷乎として斥け、遂に内閣總辭職となつたのであつた。その陸軍が、林首相の見るところに依れば、其の後、政黨人の入閣必ずしも排撃せずといふ形勢になつたといふのである。

尤も議會の論戦を見ても、軍部は政黨を否認する氣かといふ追窮に對して杉山新陸相は繰り返し「議會を尊重する、政黨を否認しない、軍民は互に抱き合ひよく諒解し合つて、非常時局を突破したい」と答へてゐる。また軍部が政變の前から、「今日の既成政黨は腐敗して居るが、我國個有の憲政の發達をはかり得るやうな、眞の民意を代表する政黨の出現を待望する」と唱へてゐることから見ても、政黨否定が軍の眞意でないことは判るであらう。また、廣田内閣瓦解、宇垣内閣流産、林内閣出現までに至る政變の過程に於いて、軍は大い學ぶところがあつた筈、國民の同情が軍より離反せんとする傾向を來したことが深甚の反省を促したことは争はれない事實である。

今次政變においては實際、軍部は拙劣な戦ひをやつた。それは具眼者がみな認めるところで

あり、軍部もこれには既に十分気づいてゐる筈である。

軍部の第一の誤りは、宣戦の時機を誤つたことである。議會の會期中に政變を惹起せずとも、それ以前に決心すべき時機はいくらもあつた筈だ。而も既に議會に臨んだからには、政黨をして言ふだけを言はせ、したいだけをさせ、如何に政黨が庶政一新に不熱心であるか、時局擔當の資格がないかといふ事を充分に國民に知らせた上で、決戦を挑むべきであつたらう。さうすれば國民も政變の己むなき事情を納得することが出来た筈、解散を要求すべき堂々たる理由も擱めた筈である。それを再開第一日において、未だ何等の内容ある論戦も展開されぬうちに僅か濱田議員一人の言葉尻を捉へていきなり解散を主張したから、恰も軍は一時の昂奮に驅られて議會を蹂躪するのかといふ感をあたへたのである。

而もその後の戦術がまたよくなかつた。それは國民をして、軍の眞意を充分諒解せしめるといふ工夫努力が足りなかつたことである。口無調法者が議論に言ひまかされて、いきなり暴れ出したといふ恰好である。宇垣内閣を流産せしめた場合において、それは殊に甚しく民心に悪印象をあたへたのである。

國民はこぞつて宇垣内閣の出現を歓迎した。これほど廣汎熱烈な大歡呼に迎へられて組閣に登場した者は、我が憲政史はじめて以來といはれた位である。それを軍部獨りが押し切つて反對した。それには言ふに言はれぬ事情もあつたに相違ないが、出来るだけのことを國民に訴へ、國民の瞭解に努め、徒らに無理押しをして居るのでない理由を納得させるべきであつた。ところが一向かゝる努力がなされなかつたのである。軍の聲明とも新聞記者の創造ともつかぬ様な、軍の意向といふものが種々雑多に報導されはしたけれども、それらは徒らに口實を述べてゐるかの感をあたへるに止まつた。宇垣を排撃した眞の理由については、今日もなほ國民は全く混沌のうちにゐる。この理由不明な宇垣排撃が、どれほど民心に悪影響をあたへたか知れないのである。

ものを言はずいきなり打つて掛かるやうな、斯うした軍部の態度は、國民をして、いよく軍部は獨裁政治に突進するのではないかといふ恐怖を抱かしめた。今日の國民は既成政黨を信頼せず、従つて議會にも大した期待を持たないが、然し議會を奪はれるといふこと、國民の參政權を剝奪されるといふ事に對しては多大の關心なきを得ず、此の點だけは最後の一线を守る

決心を相當に持つてゐる。この決心を刺戟されるに於いては、猛然たる反撥氣分が擡頭するのは當然の勢である。陸軍の態度は正にこの生命線に觸れんとするかの如くであつた。宇垣大將は大命拜辭の聲明に於いて、『今日の事態は、フアツシヨか否かの岐路に立ちありと信ず』と所見を述べたが、國民多數も同様の感覺を抱いてゐた。それがまた、軍部内の反宇垣に抗して敢然出馬した宇垣大將への聲援を一層高める原因ともなつたのである。

民心を失つては、軍部と雖も何事もなし得ない。廣義國防とは、先きにも述べに通り民心を一にして眞の舉國一致を得る謂に他ならず、民心離反してはいかに物質的準備を充實したところで何の役にも立たぬ。否、いはゆる狹義の國防ですらも、充分には整へ得ないやうな、支離滅裂の状態を招かぬとも限らない。各國の歴史に見ても明かな通り、國內に一旦抗争が開始されると、抗争は抗争を生み、對立は對立を生じ、止めどなく禍亂は發展する危険がある。

林首相が組閣最初の政綱聲明において、特に「和を以て尊しとす」といつたのは、最近の情勢に顧み、特にこのことを感じたからであらう。軍部の警戒するところ勿論こゝに在らねばならない。當然、その後の議會においては、軍部は政黨に對しても、互ひに誠實を披いて談じ合

はうではないかと云ふ。態度を明瞭にしてゐるの

三、政黨は何を學んだか

政黨は軍部と決戦しようなどと云ふ確信をはじめから持つて居らぬ。非常時の嵐にひたすら首をすくめて、早く嵐の過ぎ去らんことを祈つて來たに過ぎぬ。然るに廣田内閣の末期に至つて、やゝ其の態度が變化を來した。その一原因は、二月事件後の肅軍の進行によつて、軍部を甘く見はじめたことであらう。もう一つは廣田内閣の庶政一新政策に對して、資本家的現状維持勢力が防戦を開始し、これに政黨が後押しされたことである。

二月事件のやうな暴力變革は國民に容れらるべくもなく、成功の望みがないばかりか、却つて革新の障害にすらなる。軍部自身にひびが入り、軍部に對する國民の同情をも失ふ。そこで軍部は肅軍によりて、さういふ危険な個々の革新運動を抑へつけると共に、統一された軍一體の力を以て合法的革新に乗り出して來たのである。これが爲めに軍部の革新勢力としての陣容

は、却つて非常に強化され根強いものとなつたので、決して軟弱化したのではない。それを軟化と解したところに、政黨の非常な誤りがあつたわけである。

杉山陸相による陸軍の三月定期異動で、中央部の重要椅子に澤山の異動があり、師團長も七名から動いた。これに對して世間にはなほ相變らず種々の噂が行はれてゐる。強硬分子が左遷されたとか、或は梅津(次官)イデオロギーによるものだとか、寺内前陸相の方針をそのまゝを杉山陸相が代行したものであるから何うであるとか、種々の批判があつた。然し陸軍の異動をいまなほ派閥的(思想的、人的いづれにしても)見るのは全然失當といはねばならない。今日の陸軍異動は最早や「彼は何ういふ思想であるから中央に、彼はこうだから滿洲邊りに飛ばさう」と云つた人事の詮衡が行はれて居ないのである。今度の三月異動では、陸軍省軍務局、人事局に目立つた異動が行はれた。この兩局は軍的に關し陸軍大臣を補佐する機關として最も重要な地位にあり、従つて政變後こゝに重要異動があつたのは當然といへる。けれども其の異動のあとを見るに、新舊入れ替つて人物の間に始ど何らの著るしい色彩の差違も認められない。舊軍務局長磯谷中將と、新軍務局長後宮少將との差違は、只だ一方が背が高く、一方が背が低

く、一方が支那通で片方がいくらか經濟智識が多いといふ程度にすぎない。他の人々も皆、この程度の差違である。

そこで、今度の人事で中央部が弱くなつたか強くなつたかといふ質問が、陸軍の政治的關心の強弱を意味するのであれば、現在いかなる人物を持つて來ても陸軍の政治的關心は五十歩百歩ほどの違ひもないであらうといへる。これは部内情勢に精通する者の殆んど一致した意見である。政變を経て陸軍の對議會態度はよほど慎重になつた。けれどもその政治關心、即ち庶政革新への關心は少しも後退してゐないのである。

政黨方面において牢固として抜くべからざる軍部の革新意志を見直すものが増加し、何とかして軍部と握手提携することに依り政黨の活路を求めんとする者が増加して來たことは自然の數である。また軍部と積極的に抱き合はんとせぬまでも、軍部の時局認識について、國際と國防の事情について、もつと正確な智識を得て正しき時局對策を得たいといふ殊勝な心掛けから、軍部に接觸しようとする者も多い。これに對して軍部はもとより忌避すべき譯合もないが、只だ政黨一部の者と軍が通謀し、政黨攪亂を謀るとか、政黨樹立に參劃するとかいつた形

となることをば、杉山陸相は大いに嚴戒してゐる。萬一、軍がこういふ政黨運動に捲込まれるとなると、それこそ狭い意味に於ける「政治に拘泥」することとなり、黨争の片棒を擔ぐ破目となるからである。

しかし軍部も政治に關心する以上、政黨にも無關心でゐられないのは當然だ。眞に國民の意志を代表する清新な政黨が出現し、腐敗せる政界を淨めて呉れることは軍部も既にその希望を表明してある。そこに政黨方面からも、新黨樹立運動の促進さるべき一理由がある。

既成政黨人から云はせると、今日のやうに政黨が軍部と睨合つてゐたのでは何時までたつても政黨は政權にありつける機會が來ない。政權の半座なりとも分けて貰ふには、軍部に接近し軍部と握手するほかない。これが政略的に軍部と抱合せんとする連中の思惑。

もう一つは、必ずしも斯かる政權慾に捉はれたものではないが、今日の如く軍部と政黨が對立し、相争つてゐたのでは時局乗切りは骨束なく國家の爲に深憂に堪へない。宜しく軍民一致をはかり、政黨も従來の自由主義的な憲政常識意識に捉はれることなく、政黨を更新し議會の新機能を見出すべきであるとするものである。

これに對して飽くまで政黨の傳統的精神を守り、政黨政治を固持し、議會主義の建前に立つて軍部に對峙し、やがて軍部勢力凋落の秋をまつて失地回復に乗り出すべきであるとする保守派、この見地をとる者は既成政黨内に於ける所謂革新派と對抗する所の幹部派に多いのである。幹部派が現状を保守せんとするから、現状變革のために革新派が生れる、これは他の世間でも政黨でも同じことである。

今これらの政黨事情が、軍部の對政黨態度、對議會觀の移推と相俟ち、且つ林内閣の短命の豫想、野に歸せる宇垣大將の存在、金融のファツショ濃化の形勢等と相俟つて、複雑微妙な動きを潜行させてゐるのである。その前途は簡単な豫斷を許さない。

四、挫折した新黨運動

廣田内閣の末期ひそかに新黨運動が行はれてゐたことは、既に世間に暴露された通りである。この新黨運動は林内閣の出現と共に一應解消した形ではあるが、全然消滅してしまつたわ

けではなく、餘蘊はなほ諸所に盛つてゐる。すでに前節で述べたやうな、時代の要求がある以上、これは當然な話であつて、これがいつ如何なる機縁を得て、再びパツと燃え上るか知れぬ。林内閣の短命説が、次期政権を目ざしての新黨運動を一層促進してゐる事情は、看過されてはならないのである。

寺内陸相は内閣議會に解散を要求した際、何を頼む所があつたのかといふ事は、一つの疑問とされた。解散になれば總選舉だが、政府與黨のない選舉をやつて見たところで、結果は既成政黨の分野に多少の出入りが行はれるに止まり、親軍的の右翼愛國政黨の進出などは餘り期待は出来ない。寧ろ無産黨が再び伸びて来る可能率の方が多しと見なければならぬ。然らば既成政黨が徹底的に疲弊し、再起の力がなくなるまで何度でも重ねて解散を斷行するか。さうなれば最早や純然たるファツシヨに轉化するもので、そんな勢力は到底廣田内閣如きにあるわけはなく、それこそ戒嚴令下の軍政府によつても強行するはかない。それは非常時初期の激變時代における非合法派の思想に逆戻りするものである。斯様なことは今日評さるべくもないのである。

そこで寺内は何を期待する所があるのかと世間は疑つたのであるが、其後おひ／＼新黨運動の存在が知れて、寺内の期待はそこにあつたのかと辨されるに至つた。寺内の期待はそれだけではなかつたらうが、新黨に多大の期待を抱いたことは争はれぬやうである。

この新黨なるものは、必ずしも單一の運動ではない。その参加者の思想も種々あれば、人的にも相錯綜してゐた。しかし大體を分けて云へば、宇垣大將を擔がんとする數年來の連續潮流たる政黨合同運動から出て來て居るものと、親軍派ともいふべき軍民一致黨と二つの潮流があつた。宇垣大將を中心とする一派は、民政黨の首腦部はじめその大半の黨人、及び政友會の三分の一位はこの勢力内に居るものと見られ、それに小會派や右翼中のあるもの、在郷軍人、官僚等、頗る廣汎な範圍に亘つてゐた。何ぶん宇垣大將は多年政界の惑星とされ、いつの政變にも首相候補として眞先きに數へられるやうな位置にあつたから、これに著目しこれに隨身せんとする人間が最近ますます増加してゐたことは敢て不思議とするに足りない。軍部内の反宇垣勢力がこの宇垣中心の新黨運動を悦ばなかつたのもまた、自然の數である。

親軍派の新黨運動といふのは、民政黨永井柳太郎氏あたりの「軍と政黨は抱合して協力しな

ければならぬ」といふ様な主張に共鳴して集つたもので、昨夏廣田内閣が庶政一新の策の樹立に惱み閣内の不統一や軍部の壓力などから餘命長からずと観測された頃から急速に、次期政權を目ざして新黨樹立計畫が進行した。この運動が即ち今次政變に際し暴露されたもので、参加者の主なるものは民政黨では永井、櫻内、政友會では前田、中島、昭和會では山崎、望月、貴族院方面では有馬、兒玉、小原、軍人としては陸の林、海の安保、財界人では結城、池田氏等が關係するものとされてゐる。

新黨運動が具體化の第一歩を踏み出したのは、昨夏輕井澤に避暑中の近衛公を政友會の前田・中島兩氏が訪問したのが端緒で、漸次その範圍を擴大し、殊に荻窪の有馬伯爵に前記参劃者連中が屢々會合し、本年一月十七日の會合は特に注目を惹いて、ぼつ／＼その容貌が報道されるに至つたのである。この新黨計畫は最初より軍との親近を標榜し、見方によれば軍の足輕となり、軍の御用政黨ともいへるものであつたから、陸軍もそれに反感をもつ筈はなかつた。寺内はじめ首脳部は、議會解散ともなれば直ぐにもこの新黨がモノになると思つたらしい。出来たか何うかは判らないが、兎にかく話は相當熱してゐたことは事實である。

その新黨計畫が何うしてオチヤンになつたか。否オチヤンになつたと見るのは早計で、一時中止になつたと見るべきであらうが、その原因は林内閣の組閣の手違ひにあつた。林大將は自ら新黨運動の會合などにも参加し、これに期待を置いてゐたので、組閣に際しても有馬、永井中島氏等に入閣を交渉したが、組閣参謀長の十河信二氏を押し立てた革新勢力の希望が外れて板垣、末次兩軍部大臣は駄目となり、林内閣は現在重要な政治的役割りを演じつゝある滿洲組の政治勢力と縁を切ることとなり、それは林内閣の短命を豫想させる結果となつた。この弱身をもつ林内閣が更らに黨籍離脱を條件として持ち出したのだから、永井、中島の民、政兩黨人としては入閣を回避したのも當然であつた。新黨運動の足並みは茲に亂れてしまつたわけである。

しかし新黨運動の主張は、現實の政治勢力である軍と提携し、軍と政黨の衝突から来るフアツシヨ化の危険を防いで憲法政治を護り、併せて政治の建直しをしてやらうといふ、革新的基調に立つものである以上、一時足並は亂れてもまた委を變へて盛り返し、時機を捉へて具體化するものと豫想しなければならぬ。

今なほその胎動は絶えず續けられてゐる。しかしこれが容易進展せず、行詰りの状態を呈してゐる第一の原因は適當な黨首が見つからぬことである。新黨運動出發のそも／＼は近衛公を黨首に擔がんとしたのであるが、近衛公が出馬の意志の全然ないことは今や明瞭となつた。近衛公は大體、大命を拜して組閣を引受けるつもりが全然ない。それは健康上の理由によることだが、いづれにしろ、總理大臣となつて政治の中心を擔當する意志のない人が政黨の總裁になる手はないと云はねばならぬ。

近衛公が駄目ならば林大將といふ事も考へられたらしい。林大將にもその色氣が全然なかつたとは云へぬやうである。しかし内閣の首班となつた今日では、却つて政黨總裁となるチャンスを失つた。そこで最近はまだ、廣田前首相あたりまで、總裁出馬を持ち込んだといふ話があるが、廣田氏は一も二もなく斷つた相である。他方また、朝鮮總督の南大將を擔がんとする運動も相當行はれてゐるが、南大將は次期内閣の首相候補の一に數へられてゐる。南内閣への基礎工作として、南信者が新黨運動内に活躍してゐることは當然とすべきであらう。しかし南黨首説も、容易に進展はせぬやうである。

然し他方では、林内閣には新黨關係者として首相のほか結城藏相、山崎農相の兩氏があるほか新たに貴族院から兒王選相が入り、池田日銀總裁あり、これらのコンビに依つて政民兩黨に働きかけ切り崩しのチャンスをねらふのは當然のことである。それにはなほ空いてゐる大臣の椅子に、政黨人を引抜くかの噂があるのも其爲である。

五、政、民兩黨内の新潮流

既成政黨内の新黨運動に對する反應はどんな様子であらうか。先づ民政黨から見ると、民政黨は大體、この運動には受身の消極的態度をとつてゐる。勿論同黨内にも理論上・感情上黨内の現状に嫌らぬ者が少くなく、従つて新黨が理論に合致し、また黨首に有力な適當な人物が得られれば黨内でも相當にこれに走る者があらうが、適當な黨首の見當らぬ今日に於ては局外中立を堅持せざるを得ない現状である。かつて宇垣大將を中心とする政黨合同運動に奔走した富田、俵、小泉、川崎等の民政首脳部は、宇垣大將の組閣失敗以來、もはや宇垣に望みなし

として党内に深く引込んでしまった。一部にはなほ宇垣擁護を説く者はあつても、殆ど問題に
ならない。

他方宇垣派とは別に今度の新黨運動に關係したと見られる永井、櫻内といった人々は何うす
るか。永井氏は入閣の交渉を拒絶し、櫻内氏はその後、新黨運動に關係あるやの噂は事實にあ
らずと御丁寧な聲明まで出してゐる。新黨運動のはかばかしくない今日では、形勢觀望といふ
他には方法もないのであらう。

之に反して政友會の方は、形勢穩かならぬものがある。鈴木病總裁に引導を渡したといふの
が抑も、党内革新派の強硬な要求を幹部派が押へ切れなかつたからであるが、革新派即ち反幹
部派、反鳩山派は、前田、中島を中心として新黨樹立、若くは政友會の新黨化を目論んでゐる
譯である。彼らの見るところに依れば、鳩山氏の如き自由主義的政黨論を固守するものは、軍
と政黨との對立を激化し政黨をます／＼悲境に陥れ、遂には議會政治そのもの滅亡までも招
來する。この舊式な政黨論者を排して、時代に適應した軍と手を握り得る政黨に更生しなけれ
ばならぬといふのが、彼等の主張なのである。

鈴木總裁を追ひ出したのは、即ちその主張貫徹への一步前進であつた。何時でも政友會を解
黨して適當な中心人物を首班とする新政黨に合流し得るやう待機の姿勢におかんとするのであ
る。

この結果、政友會は四名の委員代行機關で統制して行くことに一應まとまつたが、それがほ
んの一時の糊塔手段に他ならないことは何人にも讀めやう。鳩山、島田、前田、中島の四名の
代行委員が何ら黨を指導して行くか。結局、一番心臓の強い鳩山氏が他の三委員を引摺つて行
くのではないかとも見られるが、革新派がそれにいつ迄も甘ずる筈はない。いづれ議會終了と
ともに、直ちに本部役員の改選が行はれる譯であるが、總務と幹事長が如何なる顔觸れとなる
かは最も興味を以つて見られてゐる。總務が如何なる振合ひで、鳩山派と反鳩山派に配分され
るかも重要問題だが、一層重大なるは、只だ一個の幹事長の椅子に誰れが据るかといふ事で、
これに依つて今後の政友會の動向は卜されるであらう。即ち鳩山派が後退し、前田、中島を中
心とする革新派が党内ヘゲモニーを掌握すれば、政友會の敢て解黨せずとも其の儘で親軍黨に
轉身し得るわけとなる。しかも党内における鳩山派の勢力はなかく、牢固たるものがあるか

ら、さう革新派の目論見通りにも行かない。

いづれにしても、民、政兩黨を通ずる新黨派の動きがバツとして来ないのは、第一に適當な中心中物の得られぬことが原因である。萬一近衛あたりが出馬し得る事情になれば、新黨は急速に具體化されるだらうが、その望みは先づ絶望といふ他ない。そこで種々なる人物が、擔き出しを試みられて、當分噂の種を蒔くことであらう。

六、無産黨は何うなるか

既成政黨とは別に注目を要するのは無産黨の動きである。軍部の革新勢力が庶政一新の斷行、國民生活の安定を徹底的に追求せんとするならば、無産政黨にも働きかけがあり相にも一應は考へられる、しかし實際は何んなものであらうか。

林内閣の組閣當時に、無産黨解散すべしといふ強硬論が擡頭してゐたといはれる。九州の淺原建三、かつて社會大衆黨に居り、先回の總選挙に候補を辭退すると共に社大黨を脱黨した淺

原建三がフアツシヨに轉向して、これが組閣本部に入り込み無産黨の隠れた内情目的を告げ、解散斷行を進言したのだといふ。社大黨の龜井貫一郎代議士が組閣本部に出入したことも知れ渡つた事實だが、これは右の無産黨解散論を阻止するために、運動したのだといはれる。はた之と相並んで、加藤勘十一派の勞農無産協議會は日本無産黨と改稱した事實もある。これも、舊稱がいかにもロシヤ臭い感じなので、林内閣の風向きにより改稱を餘儀なくされたのだといはれる。

とにかく、こんな事情から、無産黨方面では相當恐慌を來してゐる模様だ。彼等の觀測によれば、軍の革新勢力といつても、國防を第一とする軍部が實際問題として現經濟機構を否定し得ざる以上、軍事費の増加に伴つて國民生活が壓迫されるのは必然である。そこで軍部としては第一に、無産黨の如きが勢力増加して、國民生活の角度から深刻な軍事費批判が展開されることは此際好まない。然るに既成政黨の現状を以て推移すれば、無産黨の勢力が中央地方を通じて選挙のたびに進出するのは避け難い勢である。そこに軍部の悩みある。もう一つは、これらの無産黨は合法政黨であり、議會で活動することを目的とするのであるが、之等の勢力が議

會に段々進出して來ると、他政黨との對立抗爭が強烈になり、議會を益々鬭争の舞臺化する。これも軍部の甚しく憚忌するところである。

こんな譯で、林内閣組閣の最中に現はれた無産黨彈壓の颱風の卵は、今後いよいよ發達し無産黨受難時代が再びやつて來るのではないかとの警戒が、おひく其方面に眞劍化して來たわけだ。

國防充實の絶對必要は今日何人もこれを否定せんとする者はないが、國防充實と相並んで庶政一新が行はれ、眞の國民生活安定策が實行されぬときは、國家の豫算面に現はれた國防費の偏傾となつて、軍備のために國民が犠牲とされる傾向を甚しくする。さうなつて來ると、國民はいくら愛國心を有つてゐても、日々の生活が苦しく食物も満足に食へないといふ有様に對しては苦痛と不平を禁じ得ない。而も一方に、軍需景氣によつて富める者がますます富むといふ如き状態があるならば、大衆の不満は一層増大されざるを得ない。こんな状態の下に於ては、大衆の物質的利害一天張りがやつて來てゐる無産黨が、ますます其の魅力を増大し進出の機會を得ることは云ふまでもない。

そこで國民生活の安定政策をどしどし進めて、國防費は急増しても決して國民を飢えしめぬといふ見込が立たぬ以上、無産黨の進出を食ひ止める方法は、彈壓の一手よりないわけだ。

七、庶政一新の方向轉換の兆

國民生活の安定を歴代政府は謳つてゐるけれども、少しも其の實は擧つてゐない。林内閣がどこまでやれるかと云ふことも、此の議會あたりの態度を見れば頗る怪しいものである。既成政黨に至つては、僅かな政府の庶政一新策すらもこれを打壞すことに専念してゐるのである。前議會における退職積立金法の骨抜きは其のよい一例だといへる。

政府の國民生活安定策なるものも好い加減なものである。今度の十二年度豫算でも、僅か五千萬圓ばかりを出して夫れが國民生活安定の費用であるといふ。まるでアカギレに膏藥をはる位の事にしか扱つてはゐないのだ。

國民の生活を眞に安定せしめるといふからには、少くとも國民は失業しても食ふに困る心配

はない、病氣になつて醫者にかゝらぬといふ心配もない年を取つて働けなくなつても生活の保障がある、凶作にも草根木皮を食ふほど窮乏しない、といふ程度の保障があたへられねばならぬ。それは何も政府の救助によるのでなく、地道に眞面目に働いてさへ居れば、それだけの生活は保障されるといふのでなければならぬ。然るに政府のやることは、僅かばかり税金を軽減するとか、大衆の購買力を増加するとか、當面の氣やすめの政策ばかりで、而も一方には煙草の値上げを斷行したり、消費税を増加したりしてゐる。國民生活の眞の安定などは、遙かに縁の遠いことばかりである。

軍部の革新勢力が唱へた所謂廣義國防に立つ國民生活安定なるものは決してそんなものではなかつた。資本主義經濟の根本に是正を加へ、富の偏傾を匡し、國家の負擔を窮乏大衆の肩より富裕階級に移すことに依つて、國防の充實と國民生活の安定化は並行はれるとしたのであつた。しかしそれが何うして斯くも現實化されないかと言へば、斯かる政策を實行するには、國民大衆を背景とする強大な力がなければならぬ。軍部だけで行はうと云つても出来る相談ではなかつたのである。軍部だけで獨力これを強行せんとすれば軍部獨裁のファッショとな

る。斯かることは國體が許さず國民が容認しない。そこで實際問題として軍部は急進的非法的の運動を一掃し、肅軍統制を行ひ、改革を漸進的にし各方面の摩擦を出来るだけ少くしようと圖るに随つて、資本主義の現經濟組織を一應肯定してかゝるといふ風になつた。少くとも林内閣における現在までの軍部の態度はさう見える。

林内閣の經濟政策の調子は、廣田内閣と大分その趣きを異にして來た。それは第七十議會を通じて疑ひもなく看取されることである。結城藏相の馬場財政に對する修正は財界から大いに歓迎され財界に明るい氣分が射し込んだやうに見えるが、それは何處に理由があるか。それは軍事費を中心とする豫算が縮少したためでなく、反對に財界自身がこの膨脹豫算を積極的に抱擁し處理せんとする空氣になつたからである。そして此の空氣は何うして醸成されたかといふに、夫れは結城藏相のいはゆる生産力擴充なる標語に盛られた一聯の内容につきる。日銀の機能擴大強化し、興銀その他の投資銀行の信用をバックして、生産力擴充に資金を動員せんとするのが金融資本の生産が擴充に對する政策なのである。

これは、その目ざす目的が軍需工業の生産力の擴充であるとしても、同時に日銀の金融機構

を通じて金融機關の産業制覇を強化するものであり、そのことは又、公債問題においても金融機關の公債抱擁力を増大するのである。この金融資本強化の方向は、従来軍需工業を通じて間接的に利益してゐた金融機關をより直接的に利することとなると共に、金融及び産業を一貫せる、コンツエルン例へば三井三菱住友といった大財閥にとつては全面的に利益を強化されることになるのである。いはゞ獨占資本の自治的強化が、結城經濟政策の樞軸となつたのである。

この傾向は、電力國營案を葬り去らんとする方向にも明白に現はれて居るのであつて、次ぎの議會に電力案が訂正再提出されるとすれば、恐らく民有の自治的統制案となつて現はれるのであらうと見られる。そこで茲に注目されねばならないのは、電力國營案軍部の絶對支持を驅はれて出現したものであるにも拘らず、この放棄に當つて軍部から何等の苦情も提起された様がないのは、電力統制は必要たるに變りはないが資本家自身の自治的統制でも差支へないといふのであらう。さうすれば、獨占資本の自治的統制は軍によつて承認された新經濟政策の中樞であると見てよく、従つてたゞ電力國營案の意圖の少くとも一つであつた國民生活への考慮は、こゝに振り捨てられた影となつたのである。

斯かる傾向は、言葉をかへて言へば前内閣建前とした廣義國防への移行である。この新政策に呼應してか資本家團體たる日本經濟聯盟は三月初め、豫算は軍事費中心に編成し他の經費は出来るだけ切りつめるべきだと云ふ建議をした。これは資本家的利害から當然の希望であるとは云へ、都市農村の勤勞階級を忘れ、中小工業者を無視した感あるその狹義國防の謳歌は、これを如上の政府態度と照合して、今後我が經濟の動向を察知せしめるに足るのである。

而も經濟は政治によつて制約せられ、政治はまた經濟によつて約せられる。この變化せる經濟政策の動向の下に於いて、政治の動向が如何に影響されるかは推測に難くないであらう。

八、國民の黨出現の必然

軍民抱合の政治といふことが頻りに云はれ、既成政黨方面における新黨運動はこれに拍車をかけられてゐる。それは軍部と緊密に提携し得る政黨をつくと云ふにある。しかし其の軍と

の提携とは、何を目標としての提携であるか。今日の既成政黨はいづれも資本主義の温床に育成され、培養されたのであつて、その生れ乍らの性質は今日と雖も依然變化してゐない。國民の代表とは稱するものゝ農村に於いては地主の代表であつて小作人や貧農の代表ではなく、都會に於ては、労働者や小収入者の代表ではないそれが彼等をして、議會に於いて、今日までも庶政一新の國民生活安定策に一々反對せしめ來つた理由である。

然るに若し、政府が獨占資本との協力に依る經濟政策に進出し、軍部またこの新動向を認容するといふことになれば、既成政黨としては頗る都合がよい譯である。自己の本性から生れ去る必要なく、たゞ其の装ひをかへ、人事的組合せを變へるだけで事足るのである。而して金融寡頭支配の進行に伴ひ、政治もこれに照應して一黨專制的政治に進展するのは必然の経路と見ねばならないが、果して斯くの如きことが其儘許されるか何うか。國民生活の安定を約する廣義國防がかくの如く無難作に放棄されるや否や。そこに將來の複雑性の横つてゐることを感ずる。

しかし大體、少くとも林内閣の下に於いて、斯くの如き金融フアツシヨへの傾向が持續され

これに應じた御用政黨が新たに結成されたとした場合、それに對して如何なる反應が起るか。

國民は必ずや國民生活の側に立脚した處の、國民の黨を要求するであらう。その要求に今日の無產政黨が適當に應じ得るものとは思はれない。何となれば無產黨は今なほ、階級の黨としての性僻を帯び、國民の黨たるべく餘りにも偏狹だからである。而して其の反國體的の歴史がよくない。人物も貧弱である。苟も國政を擔當するに足る人物は、今日の無產黨の中には一人も物色することが出來ないではないか。

そこで新たなる國民の黨が生れなければならぬのである。それが如何なる方法により、如何なる人物を中心として現れるかは全然豫想もつかない。然し必要は必ず實を生ずるのである。いかなる意外の人物が、いかなる意外の方面から飛び出さないとも限らないのである。

これに關聯して、宇垣氏が相當注目されてゐる。宇垣氏は軍部の反對により組閣に失敗し野に隠棲した。しかし其後になつて宇垣氏の許に全國から殺到せる奮起激勵の手紙は六七千通にも上つてゐるといふ事である。單に再起を希望せるもあるが、陣頭に立つて新政黨組織に邁進せよとけしかけて居るのが多いと云ふ。宇垣氏もこれには餘程感激して居る相である。

宇垣氏が政黨組織に乗り出す場合、如何なる勢力を基礎とせんとするのであらうか。宇垣氏は多年の間既成政黨に工作を施して来たことは事實である。その爲めに、直接宇垣氏の世話になつた連中も、政民兩黨、其他小會派を通じてかなり居る筈である。然しこれらの既成政黨人の對立は、過般の政變に當つて何等の役にも立たなかつた。宇垣氏を積極的に支持して反宇垣勢力に對抗せんとする動きは、少しも現はれなかつたのである。宇垣氏もその臍甲斐なさにはつくづく呆れ、既成黨人頼むに足らずといふことを更めて深く感じてゐるといふ事である。

宇垣氏が既成政黨の勢力の上に新黨を組織せんとする希望は、今度かぎり放棄したものと思へばならぬ。宇垣氏が乗り出す場合は、必ず國民大衆を基礎とする、國民の黨を目ざすであらうとは確實だ。たとへにしても資金が要る。今となつて斯かる宇垣氏の企圖に對し、資本家方面から資金が多く集る筈もないから、此の點に大なる困難があることは否まれない。

九、右翼は何うなるか

最後に右翼愛國團體は何うであるか。右翼方面も今次政變以來やゝ活況を呈して来たが、未だく何處にも有力な勢力の擡頭を見ない。右翼愛國團體の数は全國に亘り何百とあるが、いづれも纏つた大勢力たるものはなく、互に異を立て綱張を争ひ、同陣營内に於いて絶えず反目し合つてゐるといふ状態だ。それでは大きな力となれないのも當然だ。

この弊を痛感して来て、昨年あたりより大同團結の氣運は大いに動いて来てゐるけれども、その進行は頗る鈍い。殆んど足踏み同様といつてよい。東京にも種々、協議會とか研究會とかいふ形態で大同團結への企圖が試みられてゐるが、それらは何れも名詮自稱の協議會や研究會に止まり、各團體が自己の城廓を維持しつゝ、代表者をこれに出してゐると云ふに止まる。それが眞に一つに固ることは、餘程のチャンスにでも恵まれぬ限り到底困難であらう。

右翼愛國團體は何故にかくも宗派的分裂をなして居るか。それには種々の理由が數へられる。一つは夫々の團體の歴史である。右翼團體は種々なる發生の閱歷を有つてゐる。日清日露戰爭時代の我が大陸政策の強硬派から發生した國士團體が連綿として今日に及んでゐるのもあれば、大正末年の社會主義流行に對する反動として、之と對抗的に發生した國粹主義の團體も

あり、また最初より國家社會主義を唱へて集結された團體あり、滿洲事變以後、時代の形勢に刺戟覺醒されて社會民主主義、共產主義より轉向し來れる右翼團體もある。更らに最近に至つては、豫備軍人によつて指導される軍人イデオロギーから出發せる團體もいくつか生れた。さうかと思へば、日蓮主義といふ様な、宗教的色彩を濃厚に帯びた團體があり、また修養のやうなものから、幾らか政治的に變化して來たと言ふ程度のものもある。

斯様に雑多な種類があつて、夫れん／＼に人的にも關係は錯綜してゐる。人的に錯綜して居るといふことは、大同結合の機縁ともなり得ると同時に、また相互に城砦を固くする原因ともなる。

否それのみならず、肝腎の指導精神に於いて、右翼中には全く相容れないものすら存在し、少くとも現在の整理がついてゐないのである。例へば日本主義と稱しても、何が日本主義であるかといふことに就いて、各派の見解は必ずしも一致しない。保守的國粹主義を以て日本主義となすものがあれば、他方には西洋文化も遠慮なく取り入れてこれを消化するのが我が日本主義の長所であると主張するものがある。政治制度について、獨裁主義傾向を唱へるものが在

る一方には、矢張り議會制度は堅守しなければならぬとするものがある。

統制經濟は右翼共通の思想といへやうが、如何なる統制方法によるべきかは必ずしも一致しない。中には統制を懐忌し、自由競争は出来るだけ保存しなければならぬと主張し、恰も資本主義を擁護するかの如きものもある。國民の大衆の生活安定を主眼として、そこに昭和維新の目的を置かんとするものもあれば、大衆の生活よりも國家の強大を先きに立て、一切をそこから割り出さうとするものがある。

斯くして右翼愛國團體と一口に云つても、その指導精神すらがまち／＼で、これが整理されるにはなほ相當の経路を経ねばならぬであらう。大同團結は指導精神が整理されてから後に、はじめて眞物となるのであらう。

そこで近い將來について言へば、右翼團體が現實の合法的な政治勢力として相當の大さに纏まるのは容易なことではないと云へる。政治を論ずることは容易だが、政黨をつくる事は容易でなく、政治を行ふことは更に容易でない。

現在の右翼團體を基礎とした獨立の政黨の進出は先づ期待されず、只だ重要なる革新的要素

として、時代の大きな革新的潮流を醸酵させ昂揚させることに、これまでの大きな役目を果たし、今後また斯かる使命を擔ふであらう。即ち一層廣汎な、総合的な國民の黨の出現する場合、これに合流して前衛的な尖鋭分子たる役目を演ずることにならう。

或ものはまた、既政黨よりの轉向分子と合流して、金融寡頭支配の御用政黨に走るかも知れない。

既成政黨の分解作用を前驅として、今や政治上の一大形勢轉換が展開されんとしてゐるのである。而してその變化の根底に横るものは、云ふまでもなく時局の進展であり、これに照應する經濟上の變化である。好む好まざるに拘らず、政治の再編成は現代に課せられた必然の運命だ。

會員募集

- ◆ 本社は新聞では知り盡せない時事問題を最も正確に批判解説し、又、最も興味深い事件其の他今日の智識として必要缺くべからざる問題を順次パンフレットの形式で發行致して居ります。
- ◆ 會員には毎月平均パンフレット三冊以上を御送り致します。會費は一ケ年三圓です。便宜の方法で御送り下さる様願ひます。
- ◆ 會員には本社發行のリーフレット「メンバー」を無代進呈致します。
- ◆ 會員中著述、出版等御希望の方は教材社事業部に御相談下さい。
- ◆ 會員の方には教材社の新刊書の通知を致します
- ◆ 中込所東京市小石川區西丸町九 教材社今日の智識研究會。

新黨樹立運動の真相

定價十錢 送料二錢

昭和十二年三月二十日 印刷
昭和十二年三月二十五日 發行

著者 上村 文三

發行人 高山 菊次

印刷所 中橋印刷所
東京市小石川區西丸町九番地

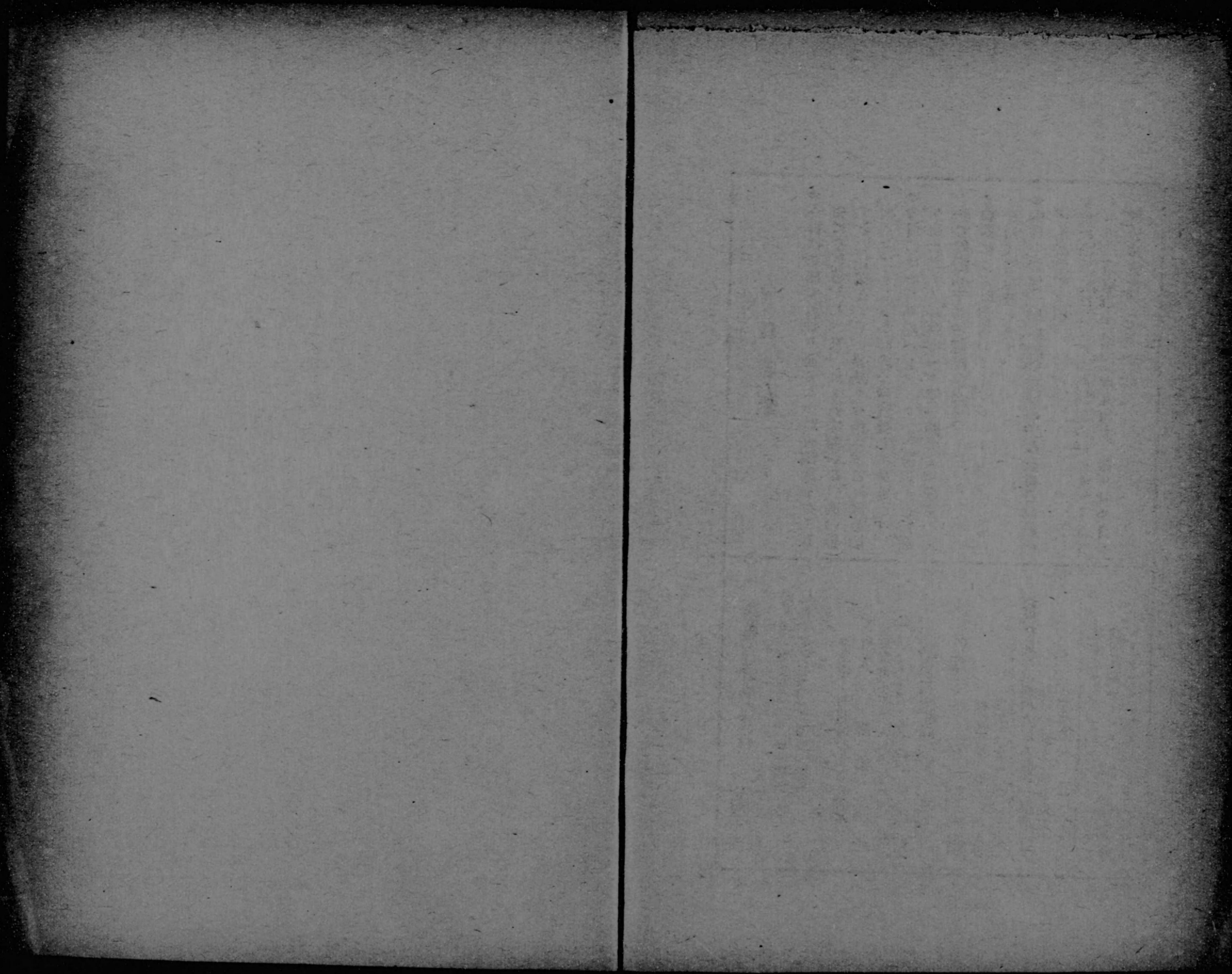
發行所 教材社

振替東京・五六一四三番
電話大塚(86)二〇三八番

大取次店 森田書房・新正堂書店

川瀬書店・菊竹金文堂
大坪信信堂

東京鐵道局公認
鐵道各驛ホーム・
スタンド一手販賣
鐵道保養會



369
337

